

第2回北九州市立文学館展示リニューアル懇話会

【日 時】平成29年5月25日（木）10時00分～12時00分

【場 所】北九州市立文学館 ワークステーション

【出席者】植田構成員、江口構成員、加賀美構成員、近藤構成員、金構成員、まはら構成員（6名）

【事務局】後藤北九州市顧問、今川文学館長、今吉文芸担当課長、岩村文学館事務局長、
藤原企画係長

< 1 課題の整理 >

〔事務局〕

資料「北九州市立文学館の課題」説明。

1「郷土の文学館」、2「楽しい文学館」、3「私たちの文学館」、4「広がる文学館」。

（資料内容の説明 各分類の代表例を説明）

〔まはら構成員〕

- ・親しみやすくするためにキャラクターみたいなものを作ってはどうか。
- ・本と読者をつないでくれる人というのがとても重要。スタッフがエプロンを着用したり、イラストを付けたりするなどして親しみやすくしてはどうか。
- ・子どもの本に詳しい学芸員が親しみやすい格好で、説明、誘導するような工夫。文学に触れる入口、きっかけになるように。
- ・POPなどの工夫。

〔加賀美構成員〕

- ・文学が好きな人たちは、自発的に来館する。がっかりさせないことが、ポイント。
- ・特別展等の来館者が、興味をつなぐ仕掛け。
- ・リタイア層は知的好奇心がある。その好奇心を満たして、ひきつけるような、文学館にするにはどうしたらいいか。
- ・専門職や研究者に対しては、それに答えられる資料などが重要。学芸員や館長との交流も望んでいると思う。
- ・子どもに対しては、体験学習などが重要。
- ・文学館の立地・環境面は、郊外型ではなくて集中型。他の施設とのコラボや情報交換の形の工夫。
- ・内部設備については、空間があるからそれを使うというのは非常にいいが、逆に使いすぎて、そこに行ったら息苦しいのは困ると思う。
- ・所蔵資料のランク付けや分類、保存・廃棄・入れ替え基準などを確認してみたい。
- ・資料の保存方法については、デジタル化すると、資料のハッキングや漏洩、消失などそういうリスクがあると思う。

〔今川館長〕

- ・他施設とのコラボについては、過去に、北九州芸術劇場とやったことがある。現在、美術館と漫画ミュージアムとで、同一テーマで何かできないかと話をしている。
- ・資料の評価基準については、特に評価をしているわけではないが、自筆資料と印刷物とでは

明確な違いがある。自筆資料などは劣化もしやすく、1点ものなので、非常に注意を払って保存している。

- ・開館時に購入した森鷗外の書簡があるが、文学館が何を収蔵しているかというのも、文学館の格につながる。

〔近藤構成員（座長）〕

- ・ここにしかないというものがあれば、それ1つでもやはり全然違う。
- ・来られた方がびっくりしたら、もうリピーターにはならない。
- ・現在の常設展示は空間的に困難な印象がある。

〔江口構成員〕

- ・名称は「北九州市立」を除いたら、ただの「文学館」となるので、愛称などがあれば印象が変わる。
- ・小中学生などはPOPをよく見る。

〔植田構成員〕

- ・子どもや車椅子の方などが見やすく、平等に情報を得られ、楽しんでいただけるような展示やスペースであってほしい。
- ・ポイントを押さえた作品紹介みたいな紙があれば、家に持ち帰ることができ、外国語対応も容易になるのではないか。
- ・美術館などでも、子どもたちが興味を持つのは映像があり、体験できる場所。
- ・環境ミュージアムでは、展示にARが導入されているが、わざわざスマホをかざす人は少なく、最新の設備が使われていない。また、学校単位での来館の時はスマホを出せない。展示設備は、本当にすぐ使えるものを取り入れてほしい。

〔金構成員〕

- ・文学館に愛称があると、敷居が低くなるかも。
- ・文学館の展示は、平面的なイメージがある。空間や五感を使った展示の工夫やワークで、ライブな文学館、生きた文学館であってほしい。
- ・本に関わるサークル活動をしている人たちに、この場に来てもらうような連携の仕方。
- ・森鷗外の本とモナカを梱包したお土産があるように、文学館ならではの土産ができないか。例えば日本語に興味のある外国人向けに読み方のルビを振った日本語読本（北九州ゆかりの文豪の本）とか

〔後藤顧問〕

- ・お年寄りや障害のある方、外国人の方にも見られるような文学館にしていきたい。
- ・ライブ感があるということが必要ではないかなと思う。
- ・最近の学生は年表など、活字はあまり読まない。
- ・展示室などが暑いので、照明をLEDに変えるなどしてはどうか。
- ・他の文学館で、愛称やニックネームなどを付けている文学館はあるのか。
- ・貴重な資料の展示はできないのだろうか。

〔今川館長〕

- かがしま近代文学館の子ども館に「メルヘン館」という愛称がある。
- 貴重な資料の常設展示は難しいので、1～3カ月程度に限って展示するか、レプリカを展示する。開館から5年くらいは、毎年、所蔵品展を開催していたが、あまり人は来なかった。

〔近藤構成員（座長）〕

- 2階展示室の所にマップが床面にあってユニークだが、空間利用としてはもったいない。
- 学生たちが利用できるサテライトとして活用できないか。
- ライブ感は非常に重要。新設された北九州市立大学の図書館の上層階は非常に静かな所で研究ができるが、下層階は賑やかで、ライブ感があり、ラーニングcommonsという形である。
- 学芸員から指導してもらいながら活動できるような工夫がある程度必要と思う。
- 学生にはボランティアで文学館に参加してもらい、逆に、学生には小中学校に出ていってもう。それが学生にはとても勉強になる。我々が文化施設を守っているか、あるいは文化を継承しているかという、アクティブな部分が必要と言われている。
- 展示の方法として、五感に訴えかけるということは非常に重要。
- 昭和時代の文学館で考えると無機質になりがちで、文学と自分との世界の構築が必要で、ハードルが高い。
- 一般的な文学館ではなく、「北九州の文学館」を考える必要がある。ゆかりの20数名の作家の方を展示しているが、その色合いがあまり出てきていない気がする。リリー・フランキーなどの応援団みたいなグッズを作れないか。
- その作家の誕生日とか、期間を限定した形で何か強調するような、スポット的な展示などを考えてみてはどうか。

〔加賀美構成員〕

- 分かりやすいものを作っていくのは非常に良いと思うが、流行やトレンドを追いかけるのではなく、「変わらない」というのも文学だと思う。
- 何でもデジタルやバーチャルというのではなく、ベースは、文学館に行って何か感じるということ。それを助けるための手段としていろいろなものを作る。それはアナログであってもいいと思う。

〔近藤構成員（座長）〕

- 持続可能性を考えると、変わるものと変わらないものというのが当然出てくるだろう。
- 研究者が集えるような場所というのも必要。ただし、全員が研究者になるわけではないので、子どもから高齢者まで含めた形で支えられる応援団をたくさん作らないといけない。

〔金構成員〕

- 所蔵品展に人気がないのは、文学に関して思い入れがないから。所蔵品の価値が高くても、分からない。
- 文学館を通して、もっと本を読みたいというふうに持っていく必要があると思う。

〔近藤構成員（座長）〕

- 図書館とどう違うのかなというところが非常に大きいと思う。

〔後藤顧問〕

- 図書館と違いは、研究者が文学館の資料を基にして研究するセンターみたいな役目などが違いになると思う。研究センターみたいな役割をしてほしい。

〔今川館長〕

- 所蔵品は、研究のための資料で、現在も、研究のために来館されている研究者がいる。開館の際に研究用のスペースが取れなかったが、広い文学館にはそういったスペースがある。
- ここの文学館は、天井をつくってしまうと空調が取れないし、構造上、音が全部オープンになる。にぎやかな文学館というコンセプトには適応していたが、静かさを望んでいる来館者もいて、苦情もある。一方で、ワークステーションの利用者からは、声が周囲に聞こえるので使いにくいという意見もある。

〔近藤構成員（座長）〕

- 市内に10の大学があり、文学サークルもある。市内の大学は文学館をサテライトとして使えるみたいな。そうするとワークステーションなどが有効に使える。
- 来館の研究者が研究している姿を見せるというのも、重要。

<2 新しい文学館について>

〔事務局〕

- 資料「北九州市展示リニューアル」（A4横）を説明。
- （目指す姿）「街の記憶を刻み、街の誇りへと繋ぐ、子どもたちが集う文学館」
- 4つの柱「郷土の文学館」「楽しい文学館」「楽しい文学館」「広がる文学館」

〔植田構成員〕

- 4つの柱に分かれているが、ここまで分ける必要があるのかなと感じる。
- 子どもたちに文学に興味を持ってもらうきっかけが必要。
例えば、明倫館の見学施設にあるような、クイズに答えて、「あなたは伊藤博文タイプです」といったキャラクター紹介の短冊を持ち帰れるような、大人も楽しめるような仕掛けなど。
- ゆかりの作家を地元でも知らない人が多い。

〔江口構成員〕

- 映像なども工夫が大事だと思う。常に見せるというより、時間を区切って上映するほうが良い。
- 立派なステージがあるので、音楽とか、いろいろなものとのコラボ、ワークショップ的な演劇など、学生や児童・生徒などを引き込んでいく工夫が、文学につながっていくと思う。

〔加賀美構成員〕

- 目指す姿には、人の記憶や風土というのがあると思う。例えば、お祭りや世界遺産の八幡製鐵など、そういった部分をも取り込んだキャッチになるといいなと思う。
- 「郷土の文学館」はソフト面。展示は固定的ではなく、定期的に見直しや追加していくことが必要。

- ・「私たちの文学館」はハード面。予算がない場合は何で補うかという問題だろうと思う。
- ・「楽しい文学館」は心地いい、楽しいなという空間をどうつくるかというところだと思う。
- ・それぞれの個々の問題をどう連携させていくか、その辺を工夫したらいいのかなと思う。
- ・あるべき姿は、先に理想像をつくって、それと現在とのギャップをどう埋めていくかという、そういうやり方もあるのだろう。

〔まはら構成員〕

- ・「広がる文学館」とは周囲との回遊性。松本清張記念館は、編集者の方が来北した際に訪れることが多い。文学館へ誘導できればPRとなる。
- ・図書館との違いとしては、文学館というのは作品の奥行き、作家の背景を少し踏み込んだところで見せるところだと思う。

〔金構成員〕

- ・方法論と予算面を合わせて、優先順位に添って進行していけたら良いと思う。
- ・1階がとてもドライな感じがする。ステンドグラスの空間が無機質な感じがする。
- ・「広がる文学館」は周辺施設との連携。施設だけではなく、外国や大学、サークルとの積極的な連携。

〔後藤顧問〕

- ・楽しい文学館では、「子どもたちに」というのは大切。体験型や靴を脱いで上げられるスペースというのがあっていい。多少うるさく騒いでも、注意されず、あまり萎縮しない。そういうスペースがあってもいいと思う。
- ・トイレはぜひ改善してほしい。
- ・ゆかりの作家は多くいると思う。どういった展示にすればいいのか。

〔今川館長〕

- ・文学館設立当初は、評価が定まっている物故者を展示の範囲とした。現在は、作家の新陳代謝が活発化していて、ある意味、忘れられる時代である。今、活躍されている方を伝えていくということの重要性が増している。

〔近藤構成員（座長）〕

- ・展示については、常設とスポット的な部分とのバランスだと思う。リピーターのためにはむしろいっぺんに全部を見せないほうがいい。
- ・音や空調の問題をクリアする建築デザインというのがあり得ると思う。

〔江口構成員〕

- ・音の問題については、高齢者は上に上がるのを嫌がるが、子どもたちは上がることをよく好む。それを利用していいと思う。

〔後藤顧問〕

- ・文学館で開催されるイベントを多くの方がご存じないことに無力感を感じた。商業的方法を検討する必要がある。

〔近藤構成員（座長）〕

- 既存のスタッフという限られた資源では限界がある。スチューデントアンバサダー制度などを導入して、教育の一環として、動ける人を活用する。
- 学生は、学生仲間というところで連帯意識が強い。SNSなどの活用も得意。そういう応援団をつくっていくというのは必要か。

〔加賀美構成員〕

- 文学館の活動を支援する友の会の会員は高齢化している。そういう応援団は友の会とは別の仕立てがいいと思う。

〔植田構成員〕

- プレスリリースを目にするにはあるが、1日限りで行われているものとかは、あまり見たことがない。情報告知というのが大事。
- グリーンパークでは、プレスリリースの発信数を増加させている。掲載機会が増加し、集客に一役買っている。
- 市の報道への投げ込みも、記者クラブに入っていないと情報が入ってこない。

〔金構成員〕

- 広報活動は、SNSも積極的に使ったほうがいいと思う。世代別に発信の方法を変える必要がある。

〔近藤構成員（座長）〕

- 広報活動については、清張記念館等も同様な問題を抱えている可能性がある。関連文化施設とともに戦略を少しトータルで考えてもいいと思う。
- 九工大など情報学部を持っているところ、西工大などデザイン学部を持っているところを利用して、新しい発信の方法やグッズを考えてもらったりしてもいいと思う。
- 研究や教育と結び付けるという視点が必要と思う。

〔江口構成員〕

- 「作家を身近に」というところでは、出身小中学校や誕生日、何座など、子どもたちはそういういったところに大変興味を持つ。

〔加賀美構成員〕

- 本を全然読まない人でも作家を知る機会というのがある。その一番大きいのは映画だと思う。

〔近藤構成員（座長）〕

- 大学で「北方シネマ」というのを始めた。小倉昭和館もコラボレーションをする。横のつながりというのが文化の広がりになると思う。
- 4つの方針という形で分けているが、植田構成員が言ったように、例えば、郷土の文学館と私たちの文学館は、大きな意味で共通にまとめられそうな気もする。最終的には、14年前の開設時のものをベースとして、優先順位を考えて、これまでの課題をまとめながら、この文学館の将来像というのを考えていければなと思う。

- 建築デザイン関係の方にレクチャーをしてもらって、話題を広げてみてはどうか。